

探究講座③「探究活動での生成 AI との付き合い方」

1. 本時の目標

- ・生成 AI（Gemini/NotebookLM）の特性と情報漏洩リスクを理解し、研究者としての「思慮深い行動」を身につける。
- ・「問い」を発展させたリサーチクエスション（RQ）の候補を、生成 AI を「壁打ち」の相手として活用することで多面的に検証する。
- ・自身の思考を言語化し、AI からより良い提案を引き出すための「プロンプト（指示文）の工夫」のスキルを習得する。

2. 本講座で生徒に身につけて欲しいコンピテンシー

生成 AI の特性と情報漏洩リスクを理解し、入力する情報を取捨選択できる「思慮深い行動」を身につける。次に、AI の回答を鵜呑みにせず、既存知の要約と自身の思考を区別して精査する「批判的思考力」を養う。さらに、5 つの要素（人物・内容・形式・制約・例）を用いた高度な「プロンプト」を構成し、AI との対話を通じて自身の「問い」を多面的に検証するスキルを習得する。これにより、リサーチクエスションを深掘りし、探究の質を自律的に高めることを目指す。

3. パフォーマンス課題と評価手法(ルーブリック)

自身の RQ および探究計画を高度化させるために、AI とどのような「対話」を行い、どのようなプロンプトの工夫によって成果が得られたかを振り返り課題（Google フォーム）に記録する。

4	3	2	1
今後の探究活動に向けて、具体的にどのようなプロンプトの工夫（5 要素の追加等）をすれば良いか、大切にしようと思うことを書いており、特に評価できる。	今後の探究活動に向けて、具体的にどのような行動(AI との対話等)をすれば良いか、大切にしようと思うことを書いている。	今後の探究活動に向けて、心がけなど、大切にしようと思うことを書いている。	今後の探究活動に向けて、大切にしようと思うことを書いていない

4. 本時の展開

探究講座③「探究活動での生成 AI との付き合い方」2 時間目

時間	学習の内容	教材・留意点
0	出欠確認・PC 準備 授業者自己紹介（W.Y 先生） 本時の目的の共有 ・リサーチクエスション（RQ）を自分一人で悩むのではなく、生成 AI を「壁打ち（相談相手）」として使い、多角的な視点を得ることを目的とする。 ・「質問上手」になることが、探究の質を左右することを伝える。	一人一台 PC 使用 スライド
5	講義①：生成 AI の特性と「思慮深い行動」 ・リスク管理：ソースコード漏洩の事例から、機密情報を入力しない重要	

	性を理解する。 ・ツールの使い分け：ネット全体の知識を持つ「Gemini」と、自分が渡した資料のみを分析する「NotebookLM」の違いを学ぶ。 ・「何をAIに渡すか」を常に考える姿勢を強調する。	
15	活動①：共通テーマ「デジタルデトックス」による試行 1. AI への相談：Gemini に対し、デジタルデトックスについての RQ と探究計画を 3 案ずつ提案させる。 2. 批判的読解：AI の提案を読み、「これは現実的に実験可能か？」「自分がイメージした前提条件が伝わっているか？」を検討する。 3. 自覚：AI の回答は既存情報の「まとめ」であり、「自分の考え」ではないことを認識する。	「1 往復で終わらせない」ことを徹底
25	講義②：プロンプトエンジニアリング（指示文の工夫） ・5つの要素を活用した指示の出し方を学ぶ。 ①人物（誰として答えてほしいか） ②内容（具体的タスク） ③形式・語調（箇条書き、優しいトーン等） ④制約（文字数、背景情報等） ⑤例（回答のイメージ）	
35	活動②：自身の RQ への適用（本気の壁打ち） 1. キーワードと文献の準備：各自の探究テーマに関連する単語や、見つけてきた基礎文献を用意する。 2. 5 要素の適用：先行研究で見つけた要素をプロンプトに加えたり、「高校生が1ヶ月でできる範囲で」といった制約を加える。 3. 対話による深掘り：気になった案について「もっと具体的に教えて」と聞き返し、RQ を深く掘り下げる。	教員は生徒のプロンプト画面を巡回して助言。
45	振り返りと記録 ・Google フォームへの回答。単なる感想ではなく、「どのような工夫（要素の追加）をした結果、どのような納得感のある案が得られたか」を言語化して記録する。	Google Form アンケート